

本書は、一二編の論文とそれに関連する一三のコラムで構成される研究論集である。幕末維新期の断絶性よりも連續性に注目して、宗教の展開を考察している。近世・近代を断絶して捉えることの問題点は、宗教史に限らず指摘されているが、そこに挑む研究は依然少なく、「近代といわれている時代のなかに、近世的な世界観や思惟様式がいかに継承あるいは展開されていったのかを、思想・宗教の面から問う」との問題提起には共感を覚えた。また、本書は宗教世界に関心を持つ者へ向けた入門書となることを意図している。著者によつて差異はあるものの、その分野の研究者以外でも読みやすい記述となつてゐる。先行研究が当該期の思想や宗教をいかに叙述してきたかを取り上げているのも特徴で（それが第一部であることには違和感もあるが）、各論文をより深く理解するためのコラムとともに、当該期

【新刊紹介】

岩田真美・桐原健真編

『カミとホトケの幕末維新—交錯する宗教世界』

佐藤 順

の研究を志す者にとって有益な内容となっている。内容は次の通りである。紙幅の都合で、コラムは省略した。

はじめに（桐原健真）

第一部「維新とカミとホトケと語り」は、幕末維新期の宗教世界に対する学術的な叙述そのものについて検討している。論文は、「神仏分離研究の視角をめぐって」（上野大輔）、「日本宗教史学における廃仏毀釈の位相」（オリオン・クラウタウ）、「世直し」の再考察—宗教史的觀点から（三浦隆司）、「民衆宗教」は誰を語るのか—「民衆宗教」概念の形成と変容』である。

第二部「新たな視座からみた「維新」」は、先行研究等閑視されてきた事象を取り上げ、維新期の断絶と連続の両面を検討している。論文は、「幕末護法論と儒学ネットワーク—真宗僧月性を中心に」（岩田真美）、「排耶と攘夷—幕末宗教思想における後期水戸学の位相」（桐原健真）、「維新前後の日蓮宗にみる國家と法華經—小川泰堂を中心に」（ジャクリーン・ストーン）、「明治維新にみる伊勢神宮—空間的変貌の過程」（ジョン・ブリーン）である。

第三部「カミとホトケにおける「維新」の射程」は、明治期における宗教世界の実態を近世との連続性を意識して描き出している。論文は、「幕末維新期のキリスト教とう「困難」」（星野靖二）、「幕末／明治前期の仏書出版」（引

野亨輔）、「仏教天文学を学ぶ人のために—佐田介石と幻の京都「梵暦学校」が意味するもの」（谷川穂）、「社寺領上知令の影響—「境内」の明治維新」（林淳）である。

本書の重要な問題提起である近世・近代の連續性の考察は、勿論この一冊で完結するものではなかろう。本書からはむしろその難しさが垣間見え、今後さらなる続編の発表が待たれるところである。より多くの研究者が、自らの問題としてこの課題に取り組む必要があることを気づかせてくれる一冊である。

（法藏館、一〇一八年一一月刊、一〇〇〇円+税）